

氏名（本籍）	杜 長俊（台湾）
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 7145 号
学位授与年月日	平成26年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	知識と行為連鎖組織の研究—知識伝達と知識共有に関わる手続きを中心に—

主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	砂川有里子
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子
副査	筑波大学 教授	博士（人文科学）	一二三朋子
副査	筑波大学 准教授	Ph.D.（言語学）	高木 智世
副査	筑波大学 准教授	博士（日本語学）	ブッシュネル・ケード

論 文 の 要 旨

会話参加者は、会話の進行の過程で自身に知識があることや知識がないことを表示する。本論文はそのような知識の表示が、会話参加者の相互行為のあり方と会話の展開に対する会話参加者の特定の態度を示すことになり、それにより会話が一定の方向に組織化されていくという前提のもとに、日本語の制度的な会話や自然会話に立ち現れる知識の表示について分析することを目的とする。この問題について、Heritage(2012)は、発話の受け手がどの程度の知識を所有しているのかを自分との比較において明らかにすることにより、その時々会話の内容に関わる知識上のスタンスをダイナミックに変化させ、そのことが相互行為の展開に影響を与える問題として立ち現れることを指摘している。本研究はその議論を受け、それをさらに精緻化させたものとしての理論を構築することに目的がある。

本論文が目ざすものは、会話参加者が知識上のスタンスを示す方法について、会話分析の手法を用いて詳細に記述し、それが会話参加者に繰り返し利用可能なものとして相互行為の展開に影響を与え得ることに関する考察であるが、この考察は、以下の3つの課題から成り立っている。

第一は、知識上のスタンスを示す方法として利用可能な「発話」について、それが会話参加者たちにどのように利用可能となるのか、その原理を明らかにすることである。本論文は、知識上のスタンスを示す方法に一定のメカニズムが存在することを示し、そのメカニズムにより、会話データに観察された一連の発話が、決して偶然ででたらめなものではなく、合理的に組織され秩序だったものとして解釈されることを明らかにする。

第二は、知識上のスタンスの表示が、会話参加者の相互行為において特定のことを達成する「手続き」として利用可能であることを示すことである。本論文は、この点に関連して2種類の手続きに注目する。一つ目は、知識を表示することによって会話参加者間に知識の非対称性が明らかになることで、より多くの知識を持つ「K+」の話者が、その知識を持たない「K-」の話者に知識を伝達するように方向付けるという手続きである。そして、二つ目は、知識の表示により、双方の知識が共有されていることが明らかになることで、その共有知識を利用して、それ以降の相互行為において特定の事柄を達成することを可能とする手続きである。

第三は、第一と第二の課題で明らかにした点を、「社会的関係」を更新したり実践したりするという観点から考察することである。すなわち、知識上のスタンスを示すことによって、特定の知識上の立場が示され、互

いとの関係が更新される。さらに、後続の相互行為の展開において、話者が相手に知識の伝達を行う、あるいは、相手との共有知識を利用するといった活動をおこなうことにより、互いの社会的関係を築き上げていく。これらのことについて、会話分析による詳細な記述を行い、会話参加者によって社会的な関係がダイナミックに更新され実践されることについて「知識上のスタンス」という観点から考察する。

本論文の構成は以下の通りである。

- 1章 相互行為と知識
- 2章 知識上のスタンスと相互行為の組織
- 3章 専門家による知識伝達を可能にする手続き
- 4章 権威者による知識伝達を可能にする手続き
- 5章 自身の経験を語る活動を開始する手続き
- 6章 共有知識をもとに受け手の貢献を引き出す手続き
- 7章 考察

1章は、相互行為と知識の関連を探求する先行研究を紹介し、本論文の立場を明らかにする。

2章は、本論文の分析手法および使用データについて説明する。

これ以降の章は、実際の分析に関わる部分で、大きく2つに分けられる。前半の3章～5章は、知識の非対称性が確認され、知識の伝達が行われる現象を取り扱うもの、後半の6章は、知識を共有することが確認され、その知識をもとに受け手の貢献を引き出すものである。

3章は、日本語教育実習の実施後に行われる「反省会」という活動の中で、反省会のメンバーによって授業の特定部分が取り上げられる際に、日本語教育専門の教員がその部分について評価をする発話に注目する。この評価の発話が、「授業の特定部分に含まれる反省すべき問題に関する知識」を「専門家」という立場で所有していることを示す方法として、どのように利用可能であるのかが明らかにされる。

4章は、コンビニエンスストアの店長と店員の会話を対象とし、店長の承諾を誘う店員の意見表明に対して、店長が承諾を与える発話を分析する。この承諾の発話が「店に関する知識を内部者・経営者の立場で所有している」ことを示す方法として、どのように利用可能であるのかについて明らかにされる。

5章は、自分の出来事を相手に伝える際に、「言いきり」という形式で、出来事を報告するという現象を分析する。その結果、単に「相手が知らない自身の出来事(私事)」ではなく、「相手との関係性において知らせる義務があるニュース価値を持つ出来事」として報告する行為を達成していることが明らかにされる。

6章では、「もの・場所・人」などを指す時に用いる指示表現を、「体言止め」という形式で産出する現象を分析する。分析の結果、特定の連鎖環境において、この現象は「指示対象に関する共有知識をもとに、受け手の貢献を引き出す」ことが可能であることが明らかにされる。

最後の7章では、3章から6章において分析した「知識の所有を示す方法」についての考察を、本論文の目的との関連でまとめるとともに、今後の課題が示される。

審査の要旨

1 批評

近年、会話分析の手法を用いて知識の有無を表示することと会話における人々の振る舞いとの関連を探求する研究が盛んである。本論文もその流れを汲むものであるが、本論文の功績は、日本語による会話を詳細に分

析し、「相手のものを評価する」「相手の意見を承認する」「自分の経験を伝える」「人・こと・物を指示する」といった特定の行為と知識上のスタンスの表示との関係を明らかにし、それらの行為が相互行為の展開に与える影響を精密に記述することによって、特定の表示の仕方と相互行為の展開との関係を詳細に記述した点にある。また、知識に勾配がある場合のみが注目されていたこれまでの研究を一步進展させ、会話参加者が共有知識を持っていることを示すことが、その後の相互行為の展開に影響を及ぼすものであることを明らかにした点も特筆に値する。さらに、知識上のスタンスの表示によって特定の社会的なアイデンティティが表され、それによって会話参加者の社会的関係が構築されることを実証的に示した点も評価出来る。本論文は、会話分析の手法を用いた詳細な観察に裏付けられた独創的で緻密な議論を通じ、**John Heritage** の理論をさらに一步進めた精緻さで議論した点が高く評価できる。

一方、本論文には解決すべき問題が残されていることも事実である。特に、制度上の会話を分析した第3章が、相互行為によるダイナミックなスタンスの変容を捉えようとする他の章とは異なり、あらかじめ定められた社会的立場をもとにした視点からの分析になっている点が惜まれる。第3章で分析したデータが「知識上の地位」を優先させがちな教員と学生の会話であったことは事実だが、本論文で主張されている「知識上の地位」と「知識上のスタンス」の区別が分析の際に十分に明確にされていない。この点については、今後さらに検討を加え、改善を期待したい。ただし、このことにより本論文の価値が損なわれるものではなく、日本語に見られる諸現象を一般言語の研究および社会的相互行為の組織の解明につなげることのできる優れた論文として、今後のさらなる発展が期待できる。

2 最終試験

平成 26 年 7 月 30 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。